我が社の社内コミュニケーション

# 納会から始まったコミュニケーションの深まり

第二工芸㈱（大阪ディスプレイ協同組合）
綿谷賢治（代表取締役）

大阪ミナミ～今宮戎神社、十日戎には、露店が並ぶにぎやかな参道を営業系の社員と共にお参りする。大阪人には非常に一般的な光景である。戎様の福を授かった後、日本橋毘沙門天（大乗坊）へ参拝。ここにも今宮戎神社付近ほどではないにしろ露店が並ぶ。その中にどう見ても素人がやっている飴を売る店がある。家庭養護促進協会という団体の方がボランティアでやっておられるので素人で当然だ。家庭養護促進協会は、いろいろな事情で親に育てられない子ども達を、毎日新聞社会部の協力を得て、毎週日曜の朝刊『あなたの愛の手を』欄で紹介し、その子の里親家族を見つけるための、愛の手運動を続けている民間の福祉団体である。そんな素人の飴屋さんを通じて、私は毎年少しずつの寄付をさせていただいている。

当社は、決して大きな会社ではないので、社内報なんてものは存在しないし、我が社のコミュニケーションと言えるかどうか…。年末の掃除を終えて一息…、お歳暮でいただいたビール等で乾杯。その他諸々の商品は社員が分けて持ち帰る。どこの会社でも良く見かける仕事納めの風景。我が社でもそんなことを行なっていた。しかしながら商品によってはなかなか分けにくい物もあったりして、7～8年前からは、社員の提案もあり、時には家にある不用品等も持ち寄ったりして品物をオークション形式にしたり、皆にビンゴカードを買ってもらいビンゴゲームの景品にあてたりして、そして、集まったお金を私が募金を行っている家庭養護促進協会に寄付するようになった。ついでということもあり、そのお金を預かるのは私で責任重大である。社員達のこの納会には、私を含め役職者は参加せずに社員達だけで行なうこともある。もちろん会社の経費ではあるが、社員達が自分達で企画し、自分達で運営する。私達は挨拶程度の参加で、オークションに出す商品や、金一封の提供を求められたりもする。…が楽しそうな社員達の談笑する声を聞いているとその程度の協力は大歓迎だ。

役職者からの命令や依頼で行なうのではなく、役職者を除く社員が自分達で企画し、自分達で運営する。そこに至るまでに、自ずと社員間のコミュニケーションが生まれてくる。そして、役職者への寄付の依頼を行なうこと等によって社員と役職者とのコミュニケーションも生まれてくる。社員達が自ら提案したことにより、普段の会社内もコミュニケーションが非常に密になった。たいへん有難いことだと感謝している。これには、管理職を除く社員だけで作る「意識向上委員会」の設立にも関わっている。この委員会からは、携帯電話にかかる経費節減策等、数多くの素晴らしいアイデアが生まれており、経営上かなり助かっている部分も多い。

社員達の納会から始まったコミュニケーションの深まりから、さらに社内の一体感が生まれ、会社全体が一つの方向へ向かって進むようになったのは、当社にとって目には見えないが、たいへん大きな収益となっている。当然社員達のおかげであり、このような社員達をたいへん誇らしく思う。そして社員達と共に社会貢献の意識を上げ、発展途上国に井戸をプレゼントと云うプロジェクトに参加する計画案が持ち上ってきた。当社の創立60周年へ向けての企画として計画し、社員達が話し合いを進めていく事で、今後ますますコミュニケーションが増していくことだろう。

『あなたの愛の手を』欄